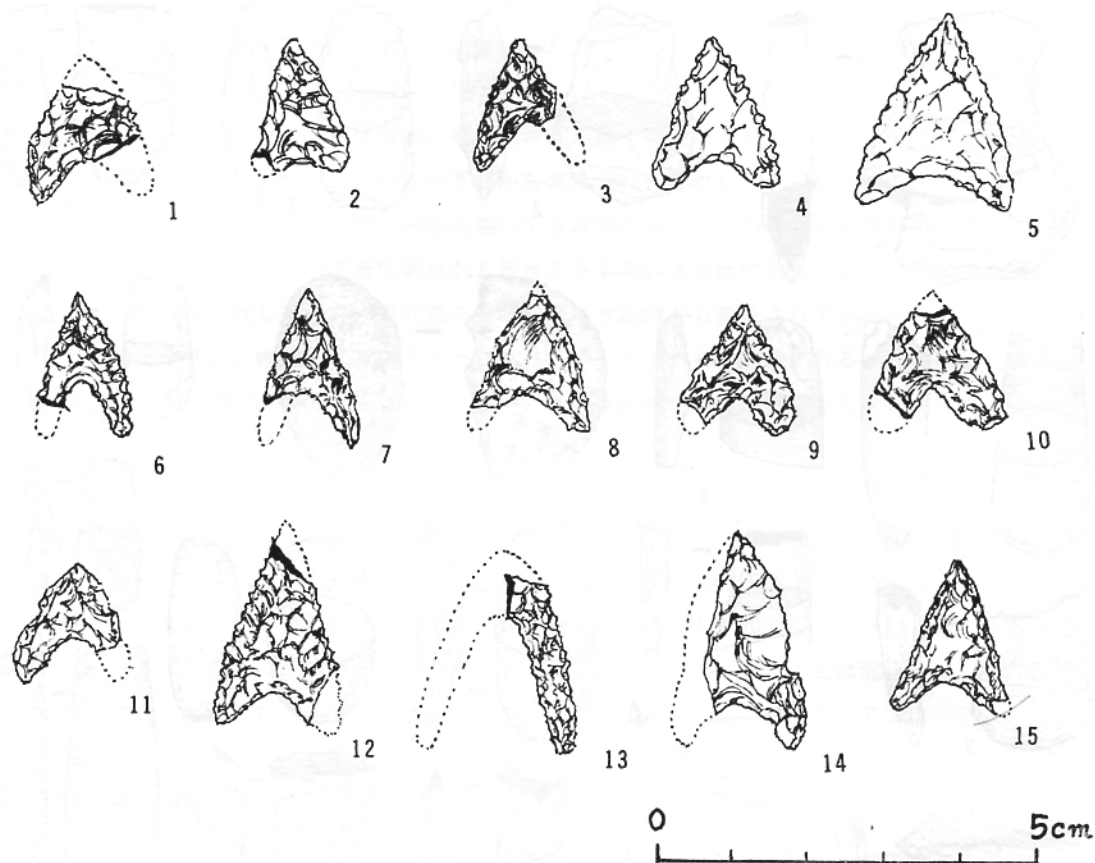




第10図 出口遺跡出土石鏃実測図

1～3、5～10 表面採集 4 第14住居址出土 11、12 第6住居址出土 13～15第5住居址出土
(注、表面採集品中には第1住居址出土のものも含む)

端共に欠いている。

13、15～17は第6住居址内から出土し、17を除きほとんどピット内より出土している。このピットは後世に掘込んだものと思われるので、3本全部がこの住居址のものとは確実に云えないかも知れない。13、16はやや小形であり、13は表面が黄褐色の被膜に被われた黒青色緻密な安山岩で、当地方に多く見られる特徴的な石材から成っている。他にもこの種の石質のものが比較的多い。14の石匙も同質のものである。15～17はみな半欠である。(17は天地逆である)

19、21は表面採集によるものであるが、いずれもやや大型のものである。19は短冊形の完型品、21は撥形の上半欠のものである。

総じて本遺址出土打製石斧の種類は、短冊形のものが一番多く、撥形がこれに次ぎ、分胴型は少ないことが分る。

ロ、磨製石斧

5点出土しているが、5、6、18が安山岩質、20はプロピライト(変朽安山岩、粒状安山岩)と思われるものである。5、6の2点が第1号住居址出土、18、20が表面採集によるものであるが、他に第5号址より頭部の残欠品が1個出土している。5は柱穴、6は炉内よりの出土。

このほか地元の農家に保存されているものの中に、蛇紋岩質の定角石斧 1 個がある。

ハ、石 匙

第 7 号址より出土した横型のもの 1 個があり、14 がそれである。石質は 13 の石斧と同一のもの。総じて本遺跡発見石器のうち、この石匙が 1 点（第 10 図）というのは、いささか不思議でもある。

ニ、石 鏃

これは従来から長倉氏等の採集されているもの等を加えると、かなり多量に上るものであり、石錘の皆無と対比して本遺跡居住民の生業を考えるに重要である。第 10 図はそのうちの 15 点を示したものであるが、大半が黒耀石製で、4 のみはチャート質のものである。無柄で二股になつたものが一般的である。

ホ、磨 石

第 9 図 7 は熔岩を材料にしたもので、一部欠損しているが肉厚のもので、第 2 号址の出土。12 は白い斑晶のある普通輝石安山岩を材料としたものと思われる。両端が叩かれたらしく磨滅している。小型であり普通の磨石とはやや異なるので、あるいは叩石の一種か知れない。これは第 6 住居址から、第 19 図 2 の土器と共に発見された。23 は表面採集品であるが、一般的に見る安山岩製（材質は 12 と同じ）のもので、周囲がよく磨かれている。

ヘ、凹 石

表面採集品 1 個があるのみで、第 9 図 22 がそれである。普通輝石安山岩が材料のようであり、白い斑晶を有している。表裏に二つずつ凹みを有している。

ト、石 棒

第 1 住居址と第 5 住居址の炉石群の中からそれぞれ 1 個が発見された。いずれも上下を失した残欠品であり、廃品として炉の石囲いに用いられたものである。石棒の一部が廃品として炉の囲み石に利用されることは多い。伊東市仏現寺遺跡にも見られる。いずれも炉の東北部に存在していた。輝石安山岩製で太形のものである。第 9 図 24 は第 1 住居址出土のもの。

チ、石 皿

第 11 図 3 は第 9 号住居址出土のものであるが、他は表面採集によるものである。1 は安山岩質熔岩から成り、4 は普通輝石安山岩製でいずれも片面のみの使用。2 は両面使用で角閃安山岩製。四者共に残欠品である。

二 土 器

本遺跡より出土した土器はすべて縄文中期後半のもので、加曽利 E I 式土器と加曽利 E II 式土器に相当するものである。後者には加曽利 E III 式的要素をもつたもの若干が伴出しているが、分離する積極的理由は見当らない。なおこの加曽利 E III 式土器の存在自体についても、その主体地域である南関東において確定的なものではないので、当地方でもその取扱いについては慎重な態度が必要であろう。ただ当地方においては沼津市鳥谷大芝原・吉原市境上ノ段等の発掘を通じて従来加曽利 E 式併行と考えられていたものが、三形式に分類できる可能性が強くなつており、それがいずれも当地方（駿河湾地方）のローカル性を具備しているので、小野は仮りに大芝原 I 式、大芝原 II 式、大芝原 III 式として捉えたことがある。^(注 1)

したがって本遺跡出土土器の場合も加曽利 E I 式併行のものは当地方で大芝原 I 式、加曽利 E II 式併行のものは大芝原 II 式と仮称したものの特徴を持つているわけである。そして後者には大芝原 III 式

に至つて盛行する文様の特徴を備えた土器が若干伴出しているというわけである。次にその概要について観察してみよう。

イ、加曾利EⅠ式併行土器（出口Ⅰ式）

この形式に該当する土器は、第4、第6、第8、第10、第13、第15の6住居址から出土しており、第1、第5住居址等からも近似したものが若干出土している。しかしこの近似したものの中には、古いものがまぎれ込んだと思われるものもあり（第1住居址の場合）、また古い形式が完全に消滅することなく、一部残存したと思われるものもある（第5、第9、第16各住居址）。あるいは第1住居址の場合も同じ残象（残存現象）であるかも知れない。

標式的な加曾利EⅠ式併行の土器は、挿図の12、13、14並びに図版10上段に見るものである。この土器の特徴は胴長の甕形土器を普通とし、口辺部が大きく外方へ開いてから、口縁が内曲する、いわゆるキヤリバー形をなすのが一般的である。第12図4、12、18、第13図13、第14図6などはその口縁部破片である。文様は半截竹管文や櫛歯文または斜行縄文を地文とし、その上に粘土紐をはりつけた隆起文が、曲線、波状、渦巻などの種々に変化して施文されている。第12図1～4、第13図10、11、第14図8～10、12などは半截竹管文の例であり、口縁部や胴上部に多く見られる。第12図5～9、第13図1～3、第14図7、13などは櫛歯文の例で、胴部に縦に施文された鋭い平行沈線文である。中には第12図10のようなやや軟か味のあるものもある。斜行縄文の例は第12図13～15、21、第13図9などで、左傾のものと右傾のものが相半ばしている。粘土紐による隆起文はこれら地文の上に見られるが、第12図8、9、第13図9、第14図14、15のような波状文、第12図7、14、第13図3、7のような波状懸垂文、第12図14のような直線懸垂文、第12図17、第15図1などのような渦巻文がある。他に第12図15、第13図5のような不規則な曲線文があり、また第12図18の口縁内曲部に見られる沈線渦巻文、第14図18に見る連珠文など様々なものがある。これらの隆起文はいずれも同一個体に併用されているのが普通である。

口縁裝飾には第12図12、第13図4、第14図6など器面を彫り込んで、平行な直線、曲線を表現したものが多く、中には第18図16のように口縁部のこの種の文様の上に、直交する粘土紐を平行に並べて籠目状にしたものもある。第12図12、第13図4のように口縁が彫刻による平行曲線の波で被われ、その上に頭の大きな隆起懸垂文がつくのは駿豆地方の大きな特徴で、これが大芝原Ⅰ式の指標でもある。この種の土器には口縁部と胴部の境に、やはり彫刻的手法による平行曲線文のある把手がつく場合が多く、本遺跡でも第6住居址等から出土している。

なお口縁部には無文のものもあり、斜行縄文で充填したものもある。底部は無文のものが多いが、第12図20のように木葉底のものもある。

第19図1はこの類の土器のうちある程度復原できたもので、第4住居址の出土である。

ロ、加曾利EⅡ式併行土器（出口Ⅱ式）

この種の土器は第1、第2、第3、第5、第7、第9、第11、第12、第14、第16の各住居址より出土しているが、細かに観察すると、次の3つに大別される。

(A) 笹竹を割つて施文したような竹管文を主とした文様構成をとるもの、およびキヤリバー型器形を有するもの一般（第1種）



第11図 出口遺跡出土石皿実測図

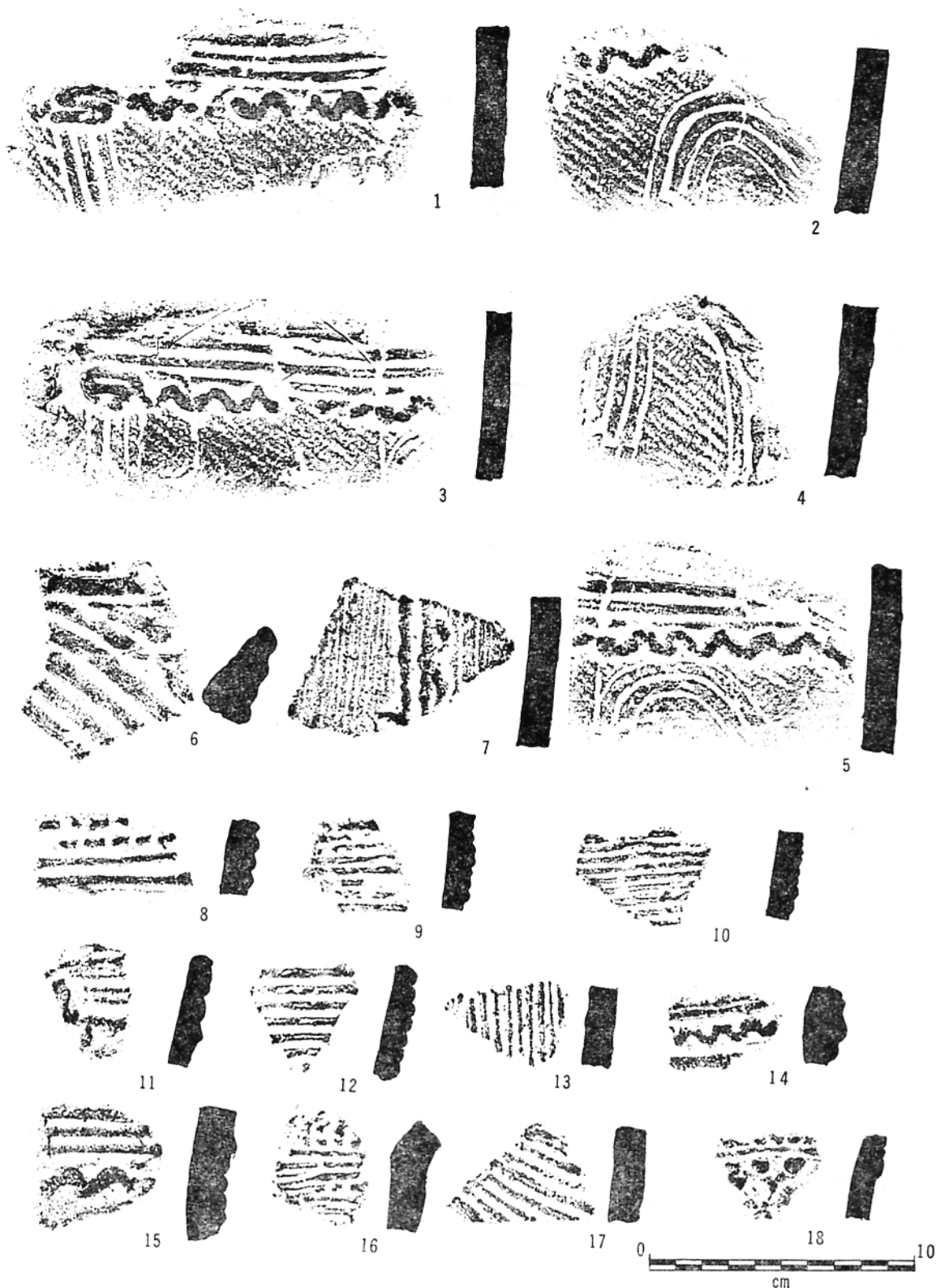
3、第9号住居址、他は表面採集



第12图 第6号住居址出土土器拓影

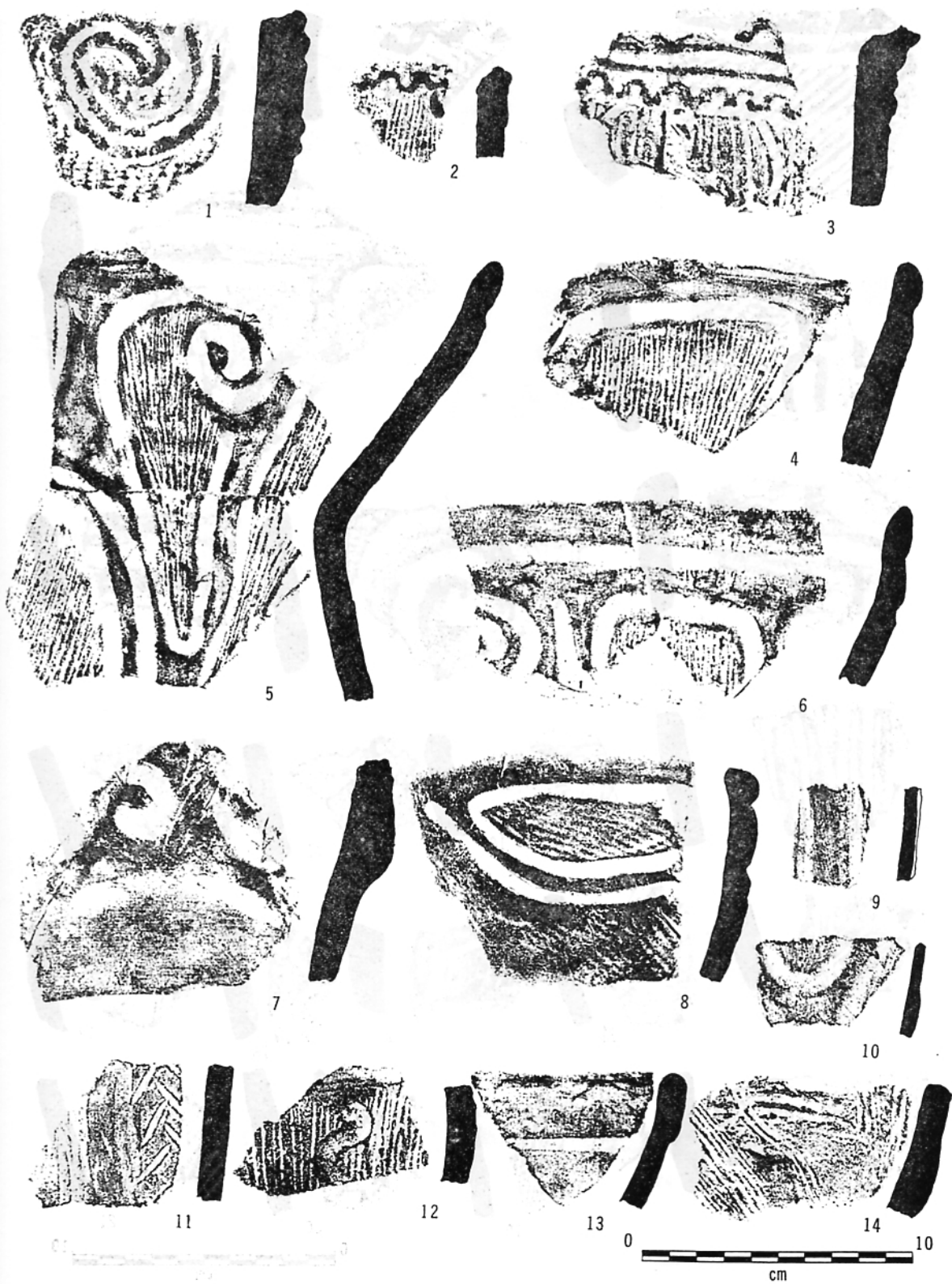


第13图 第15号住居址出土土器拓影



第14图 第16、第4、第8、第10、第13号住居址出土土器拓影

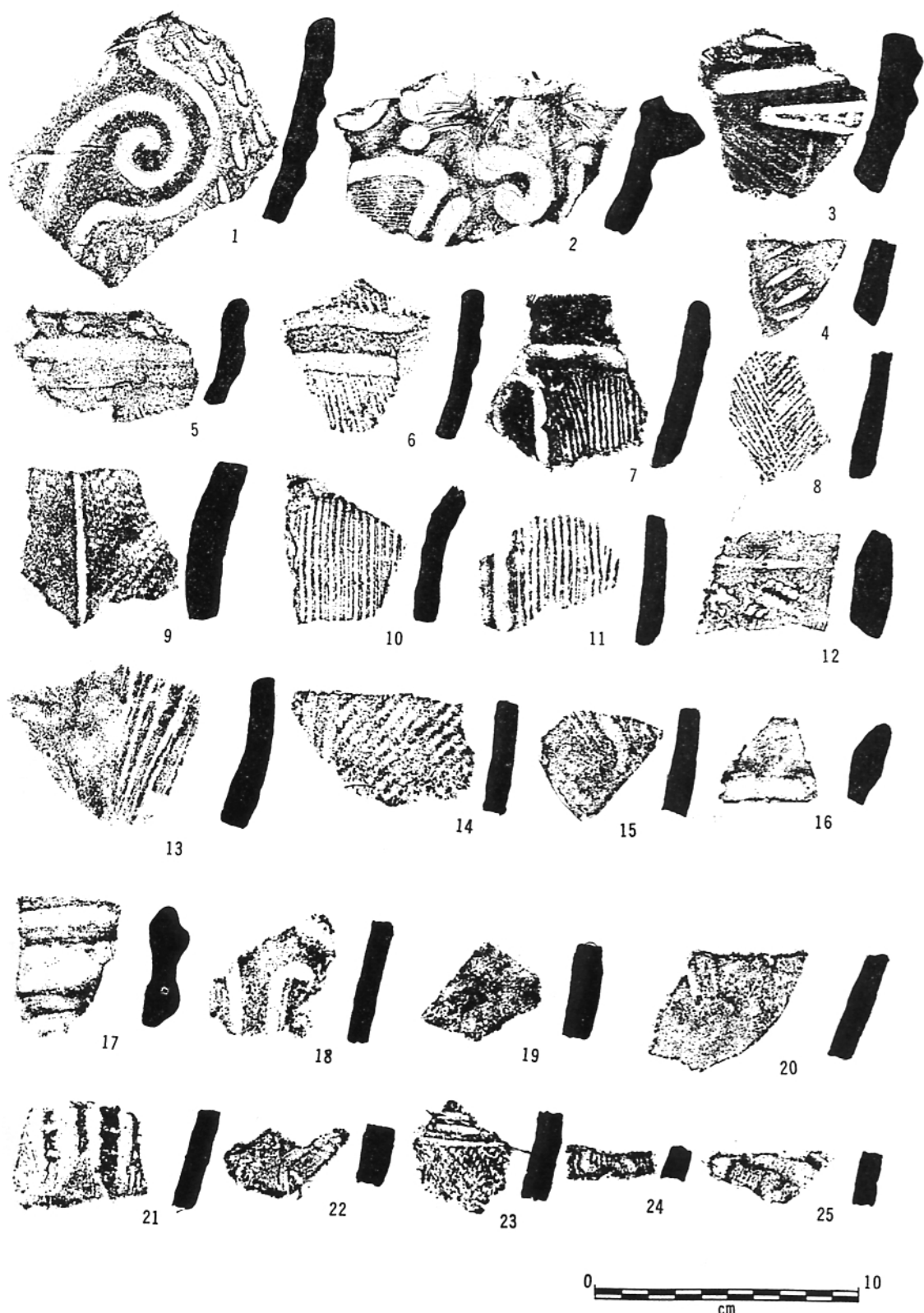
1~5 第16住居址出土 6、7 第4住居址出土 8~10 第8住居址出土
 11~14 第10住居址出土 15~18 第13住居址出土



第15图 第1号住居址出土土器拓影



第16图 第5号住居址出土土器拓影



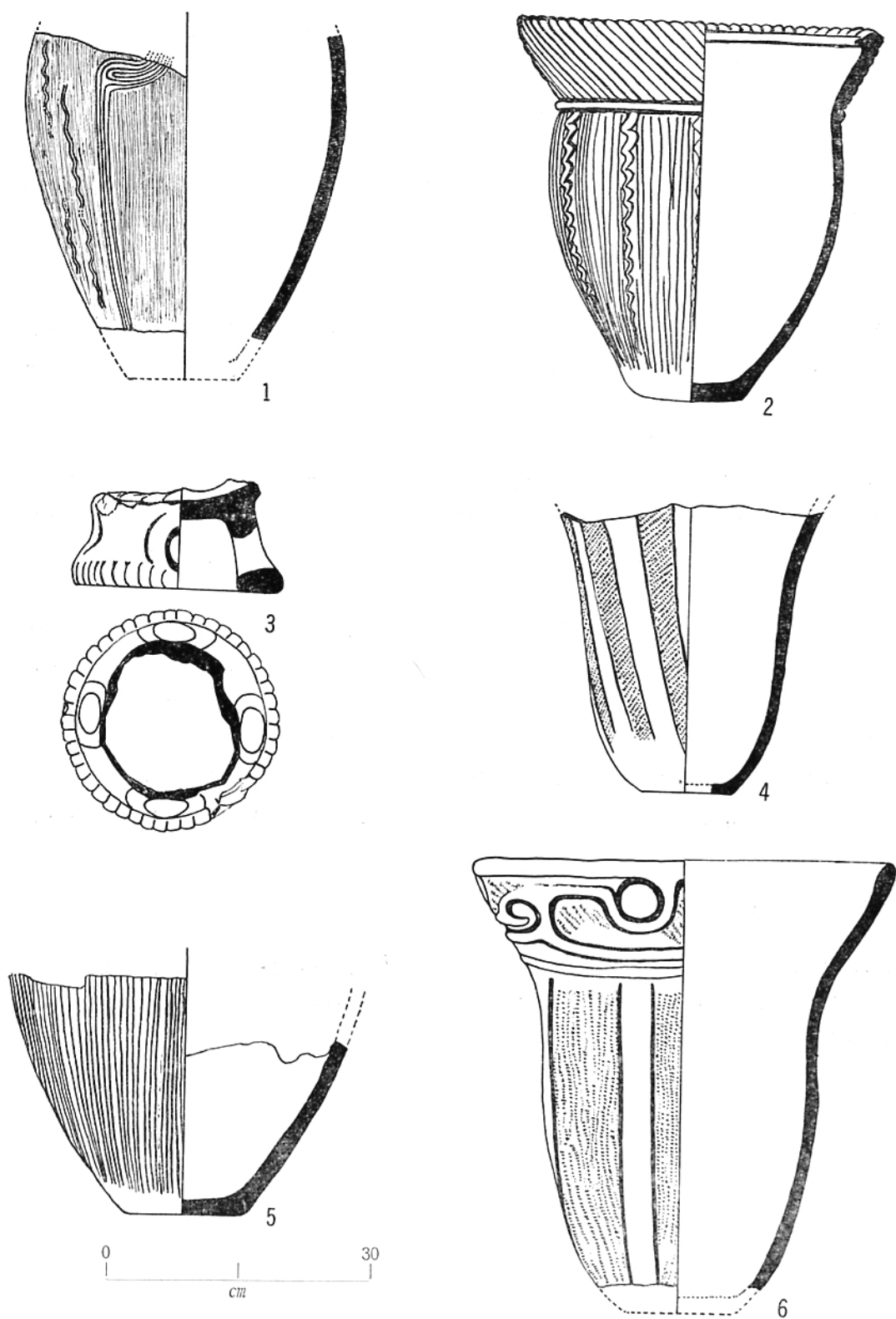
第17图 第2、第3、第7、第9号住居址出土土器拓影

1~8 第2住居址出土 9~13 第3住居址出土 14~16 第7住居址出土 17~25 第9住居址出土



第18図 第11、第12、第14号住居址出土及び表面採集土器拓影

1～4 第11住居址出土 5～9 第12住居址出土 10～13 第14住居址出土 14～23 表面採集



第19图 出口遺跡出土土器実測図

1. 第4住居址出土 2. 5 第5住居址埋没土器 3. 第6住居址出土 4. 第12住居址出土
6. 第16住居址埋没土器

- (B) 胴部の地文に縄文または撚糸文を多用し、これに隆起文および沈線文の組合わさるもの（第2種）
(C) 器面を彫刻的な低く幅の広い隆起帯が、渦巻状その他に変化しつつめぐり、その中間を不整列な条線文でまたはやや細かい「ハ」の字型連続文で充填するもの（第3種）

この三者のうち、第1種は加曾利EⅠ式併行のものの伝統を引くものであり、第2種は南関東のいわゆる加曾利EⅡ式土器である。これに対し第3種土器は甲信地方から駿豆地方を経て、伊豆七島にまで分布する特色ある土器で、大芝原Ⅱ式土器と仮定したものである。これは岐阜県にも類似のものがああり、いわば中部地方のローカリティーに富む土器といえよう。

なお第2種及び第3種では、地文の上を浅く削った連続S字状の懸垂文が一部に見られる。

形態はやや小型になり、深鉢形をなすのが普通である。口縁も平端で、装飾はなく断面が丸味を帯びたものが多い。ただし、一部には第15図18のように波状口縁のものもある。第1種はキャリパー型の口縁を有している。

第14図1～5、第15図2、第16図1～3、第5図8、第19図2、5は第1種に属し、第12図8、第16図16、20、21、第17図9、12、14、22、23、第18図18、19、21、第19図6などは第2種である。そして最も特徴的な第3種は、第15図4～6、12、第16図5、7、10、12、13、14、17、18、19、第17図5～8、10、11、13、15、18、24、25、第18図1、2、3、12、13、19、などである。第18図17もこの類に入れてよからう。第15図9、10は薄手であるが、やはり同一種のものであり、同図11及び第17図1、4はこの種に伴う重ね篋描文（「ハ」の字形連続文）である。この重ね篋描文は次の大芝原Ⅲ式土器（加曾利EⅢ式併行）において盛行するが、沈線の丈が長くなる傾向がある。この大芝原Ⅲ式土器は大体において大芝原Ⅱ式土器の特徴を踏襲しているが、口縁近くに半円形に垂下連続する隆起文または沈線文などが見られるのが特徴的である。細かい刺突文をもつて「ハ」の字状連続文を構成し、胴部に施文されるのも特徴である。中伊豆地方でも天城湯ヶ島町の月ヶ瀬から典型的なものが出土しているが、本遺跡からは全く出土していない。これは本遺跡の年代を考える上に重要である。

6. 周辺の遺跡

本遺跡の周辺には数多くの先史時代遺跡が存在しているが、まず修善寺町内のみの遺跡についてみると、別表（第3表）の通りである。（台帳番号とは「静岡県遺跡地名表」（1961年）の通し番号であり、新とはその後発見されたものである。）

第3表 修善寺町縄文遺跡地名表

通 番 号	台帳 番 号	遺 跡 名	所 在 地	地 形	編 年 (土器)	遺 物	備 考
1	142	堀 切	修善寺町堀切 (益山寺裏)	丘 陵	縄 文 中 期 (加曽利E式)	磨 製 石 斧	
2	143	大 芝	〃 修善寺 字大芝	〃		打製石斧、黒曜石、土器片	
3	144	芦 原 尻	〃 修善寺 字芦原尻	〃		石皿、磨製石斧、土器片	
4	145	日 向	〃 日向 (修善寺ゴルフ場)	〃	縄 文 早・前 期 (茅山式・諸磯式)	石鏃、石皿、打製石斧、土 器片、ナイフブレード	
5	146	上 大 塚	〃 大平 字上大塚	河 段 岸 丘	縄 文 中 期・後 期 (加曽利EⅠ式、同EⅡ式、 堀ノ内式、加曽利B式)	石鏃、打製石斧、石錘、土 器片	
6	147	本 立 野	〃 本立野 字西垣内	〃	縄文中期(勝坂式・加曽利E Ⅰ式、同EⅡ式、同EⅢ式)	打製石斧、磨製石斧、石皿 石棒、叩石、石鏃	県史Ⅰ
7	148	大 林	〃 熊坂字大林	山 陵	縄文前・中・後期(諸磯式 勝坂式、加曽利E式、堀ノ 内式)	打製石斧、石鏃、黒曜石	
8		新 平 台	〃 熊坂字平台	〃	縄 文 早 期 (茅山式)		
9		〃 中 林	〃 熊坂字中林	〃	縄 文 早 期		
10	149	小山田上	〃 加殿 字小山田上	〃	縄文中期(加曽利EⅢ式)	磨製石斧	
11	150	梅 林	〃 修善寺 字梅林	〃	縄文早期(山形押型文、楕 円押型文)	石鏃、磨製石斧	
12	151	三ノ洞	〃 修善寺 字三ノ洞	〃	縄 文 中 期	石 鏃	
13		新 神 山	〃 修善寺 字神山	〃	縄 文 早 期 (押型文)		
14	159	大 久 保	〃 大野字 大久保	〃	縄 文 中 期	石鏃、磨製石斧	
15		新 石 神	〃 大野字石神	〃	縄 文 早 期 (楕円押型文)	磨 石	
16	160	大久保上	〃 大野字 大久保上	〃	縄 文 中 期	石 鏃	
17	161	冲 原	〃 大野字冲原	丘陵緩 斜 面	縄文中期(加曽利EⅠ～Ⅲ 式)	石鏃、石皿、打製石斧、石 棒、石匙、石鏃	
18		新 出 口	〃 大野字出口	〃	縄文中期(加曽利EⅠ～Ⅱ 式)	打製石斧、磨製石斧、石鏃 、石皿、石棒、石匙	
19		〃 菅ヶ沢	〃 大野 字菅ヶ沢	〃	縄文早期・中期・後期(山 形押型文、条痕文、加曽利 EⅠ～Ⅱ式)	打製石斧、石鏃	
20		〃 前 茅 野	〃 大野 字前茅野	〃	縄文早期(条痕文)	石 鏃	
21		〃 立 間	〃 大野字立間	〃	縄 文 前 期 (諸磯式)	石 鏃	
22		〃 池ノ本A	〃 年川 字池ノ本	〃	縄文早期・前期(山形押型 文、楕円押型文、諸磯C式)	石鏃、局部磨製石斧、磨製 石斧	
23		〃 池ノ本B	〃 年川 字池ノ本	〃	縄 文 前 期・中 期	石鏃、岩版(?)	
24		〃 池ノ本C	〃 年川 字池ノ本	〃	縄 文 中 期 (勝坂式)	石 鏃	
25		〃 年 川 原	〃 年川字原	〃	縄 文 前 期 (諸磯C式)	石鏃、打製石斧、磨製石斧	
26		〃 滝 頭	〃 大平字滝頭	丘 陵 頂 部	縄 文 早 期 (茅山式)		
27		〃 瓜生野上	〃 瓜 生 野	〃	縄 文 早 期 (押型文)		
28		〃 広 野	〃 広 野	〃	縄文中期(加曽利EⅡ～Ⅲ 式)	打製石斧、石鏃、石皿	
29		〃 中 里	〃 修善寺 字中里	河 段 岸 丘	縄 文 中・後 期	磨製石斧	
30		〃 横 瀬	〃 横 瀬	丘 陵 斜 面	縄 文 中 期	磨製石斧	
31	162	柏 久 保	〃 柏 久 保	河 段 岸 丘	縄文中期(勝坂式・加曽利 E式)	スクレイパー、打製石斧、 石匙、石鏃	
32		新 鉢 窪	〃 牧ノ郷 字鉢窪	丘 陵 緩斜面	縄文早期(楕円押型文、山 形押型文)		

すなわち先土器時代遺跡2、縄文時代遺跡32（先土器と重複）で、弥生時代遺跡は皆無である。縄文時代遺跡を時期別になると早期12、前期5、中期17、後期4、晩期0、時期不明2（一部重複）ということになり、中期が最も多く、後期より急激に減少し、晩期以後姿を消してしまうことになるわけである。しかし完全に消滅したのか否かは今後さらに精査した後でなければ断定できない。

次に中期でも出口遺跡と関連のある後半期の遺跡を拾ってみると、堀切、上大塚、本立野、大林、小山田上、沖原、菅ヶ沢、広野、柏久保の9遺跡がある。このうち本遺跡に隣接する位置にある沖原と菅ヶ沢は最も深い関係にあつたと思われる。そこでこれらの両遺跡について次に概説しよう。

沖 原 遺 跡 （第1図3）

出口遺跡の北東側緩斜面を下ると、再び緩い斜面に遭遇する。これが沖原遺跡で南向きの広い斜面から多くの遺物を出土する。距離的には出口遺跡と僅か200mしか離れていない。従来はこの遺跡の方が散乱遺物の多い関係で、早くから知見に上り、菅ヶ沢、出口両遺跡の地域はさほど注目されない状況にあつた。出土遺物も加曽利EⅠ式・加曽利EⅡ式、加曽利EⅢ式を出土し、出口遺跡の場合とよく似ている。出口遺跡同様かなりの規模を持つた集落が存在したと思われるが、この方は今回の工事に関係なく、未調査のままである。石器も第3表で見る通り、各種のものを多量に出土している。

菅ヶ沢第一遺跡 （第1図2）

出口遺跡の直ぐ北東側約120m離れた一段低い地域の、沖原遺跡東方に伸びる東向き斜面から、今回の工事で三つの住居址が確認され、そのうち1つは石囲いの炉をもち、他は焼土のみの炉を持っていた。ほかにも幾つかの住居址が存在したらしい。おそらく一つの集落があつたのであろう。時期は出口や沖原と同様で、縄文中期後葉である。

菅ヶ沢第二遺跡 （第1図4）

出口遺跡の東方300mの地点にあり、両者の間には低い凹地が存在している。沖ノ原の東南部から南へ伸びる舌状の広いふくらみで、ここも農地耕造改善工事ですっかり潰れてしまった。やはり加曽利EⅠ式土器や加曽利EⅡ式土器を出土し、その範囲や地形から考えて、沖原や出口に劣らぬ集落が存在したものと推定される。

なおこの遺跡からは早期の山形押型文土器や条痕文土器を出土し、またローム中より黒耀石も発見されたので、かなり古くより居住地となつたらしい。

この四遺跡を総合的に見ると、一番北側にある沖原遺跡が元締の位置にあり、これから東と西に尾根が分れるが、その東側の尾根に菅ヶ沢第2、西側の尾根に出口遺跡が存在するのである。そして沖原と出口の間の低斜面に菅ヶ沢第1遺跡がある。

あるいは一つの大集団の中で、幾つかの小群に分かれていたのであろうか。この四つの遺跡の相互関係を明確にすることは、集落の群在構成を知る上で大いに注目される。今後の研究課題であろう。

次にこれらの遺跡の群在する大野丘陵は、北東に伸びて田原野、浮橋方面に連なるが、これらの地域はまた縄文早期及び前期の小遺跡がきわめて多く存在するところである。さらに北方には深沢川の谷を越えて田中山に至るが、ここはまた松岡、中、土沢など先土器時代遺跡や、縄文早期遺跡の分布する地域であり、歴史の流れの中でやはり関連性をもつものであるかも知れない。

7. 総 括 的 考 察

本遺跡は結局縄文中期後葉の集落址であり、加曽利EⅠ式土器と加曽利EⅡ式土器の使用された時期であることが明らかとなつた。この両形式の土器は相互に前後関係があり、第3住居址と第4住居址、第6住居址と第7住居址などの関係がこれを証明している。ついでに県東部における他遺跡の例を紹介しつつ、もう少しこの加曽利E式土器について考えて見よう。まず吉原市境上ノ段遺跡では二つの配石遺構が発見されたが、敷石の直上および同一レベルから加曽利EⅢ式土器を出土し、この敷石下5cm~20cmの間より加曽利EⅡ式、さらに25cm~40cm位の間で加曽利EⅠ式土器が発見され、加曽利EⅠ式土器の包含層下部では勝坂式や阿玉台式の土器も混つている。^(注2) また沼津市鳥谷の大芝原遺跡では第2層(地表下)から加曽利EⅢ式土器を出土し、第3層では加曽利EⅡ式土器の住居址が発見され、その下方より加曽利EⅠ式土器を出している。^(注3) このように加曽利E式土器は当地方においても、ほぼ三形式に分けられることが層位的に明らかとなりつつあるが、南関東でも本形式土器の細分が行われ始めたのはごく最近のことである。特に加曽利EⅢ式に関しては、これが明確化したのは横須賀市吉井城山第一貝塚の報告が出て以来のことである。^(注4)

従来縄文中期の遺跡はきわめて多く発見され、特に加曽利E式土器は当地方の至る所に分布して、その盛況ぶりを示していたのであるが、これがⅢ形式に分類されることによつて、その遺跡の規模なり、経続期間なりの考え方が大きく変貌してきたことは当然である。広大な面積にわたつてこの種の土器や石器が分布していても、決して一時期における大集落の跡ではなかつたのである。

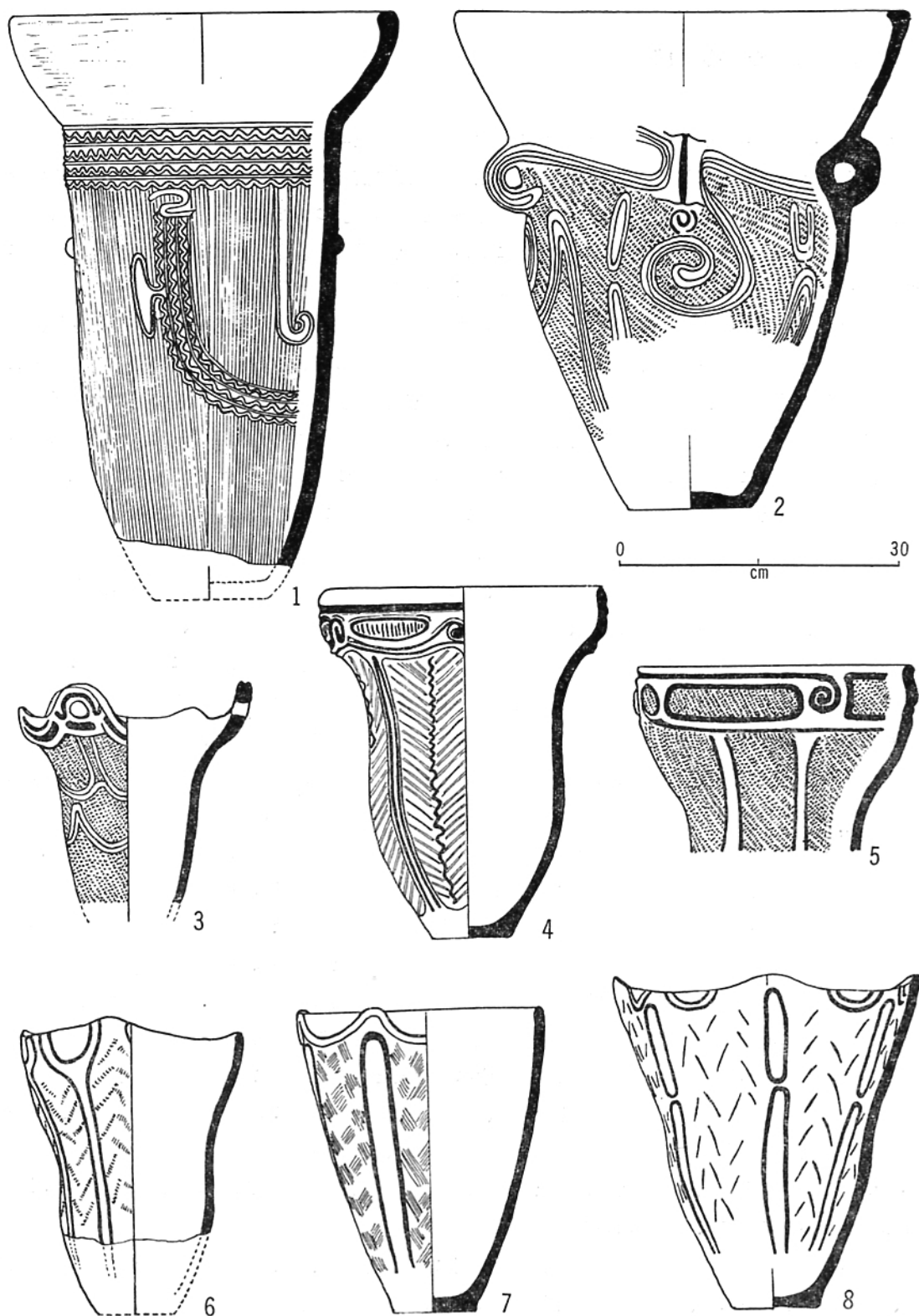
県東部における加曽利E式土器の主要出土例は、第20図に見る如くであるが、加曽利EⅠ式では熱海市下多賀字新釜、伊東市玖須美区仏現寺^(注5) 三島市壱町田字千枚原、田方郡大仁町三福熊野神社付近などがあり、加曽利EⅡ式では賀茂郡松崎町岩科西ノ段、三島市千枚原、沼津市鳥谷字大芝原、駿東郡裾野町茶畑字屯屋敷、吉原市境字上ノ段などがある。また加曽利EⅢ式土器は伊東市岡字赤坂、沼津市鳥谷字大芝原、富士宮市大岩字丸ヶ谷戸などから完形またはそれに近いものが出土し、田方郡天城湯ヶ島町月ヶ瀬字本郷、駿東郡長泉町八分平付近などからも典型的なものの破片が発見されている。当出口遺跡では加曽利EⅢ式として明確に区分できるものは出土していない。

なおこれらの三形式は一応区分されても、すべての破片が明確に決定されるものではなく、加曽利EⅡ式の時期には加曽利EⅠ式の伝統を持つた土器がある程度残り、またⅢ式の時期にはⅡ式的要素の濃い土器も伴出しているのである。これらはすべて残象として捉えることができよう。

出口遺跡の場合も調査の不十分な第4、第8、第10、第13の住居址については加曽利EⅡ式土器が出土していないというだけで、十分な調査が出来ていれば、あるいは多少の変更があつたかも知れない。つまり加曽利EⅠ式土器と考えている土器片が、実はⅠ式土器片の残象であつて、実はⅡ式の時期であつたということになりかねないからである。

とにかく、本遺跡では加曽利EⅠ式期からⅡ式期にかけて、少なくとも50~100年間の生活が考えられ、加曽利EⅢ式期には、ほぼ消滅したものと推定されるのである。

次に住居址についてであるが、本遺跡の場合は両時期共、円形堅穴の形態をとつており、いずれかといえは加曽利EⅡ式期のものが大きいようである。また加曽利EⅠ式期のものは炉に石囲いが無いよ



第20図 駿豆地方出土加曾利E式土器（主要例）

1. 大仁町三福 2. 伊東市仏現寺（以上加曾利EⅠ式） 3. 吉原市上ノ段 4. 裾野町屯屋敷
5. 三島市奥山（以上加曾利EⅡ式） 6. 沼津市大芝原 7. 富士宮市丸ヶ谷戸 8. 伊東市赤坂（以上加曾利EⅢ式）